

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第62回 ●

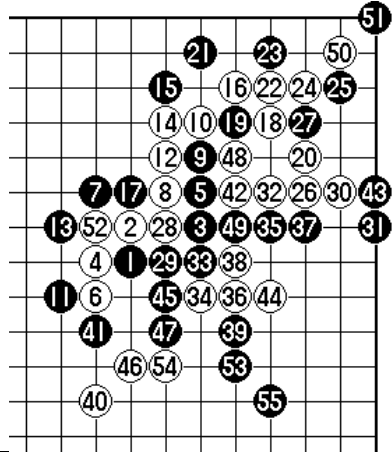
■ 世界戦の季節

西暦奇数年の8月に行われるのが世界戦である。今回はエストニアで開催されるが、残念ながら今年日本に帰省したので世界戦は不参加となった。ただし、RIF会議だけはスカイプを使って参加できた。ドイツからエストニアに行くのは実は不便で、金曜日に休めなかったのが土曜日のRIF会議は現場には行けずドイツの自宅からインターネットを介しての会議参加であった。

さて、QTには日本選手が4名参加したが、残念ながら岡部君のみの通過となった。何局か振り返ってみよう。

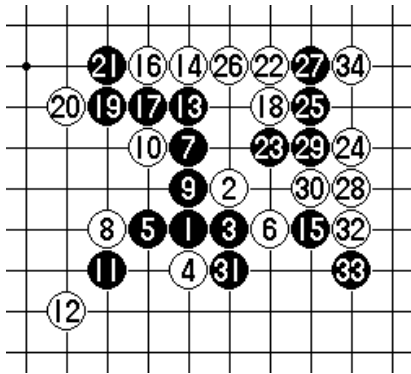
難なく通過したように見えた岡部君だが、実は危な

い場面もあった。QT4回戦、エストニアのパジュステとの一戦。岡部君が黒である。

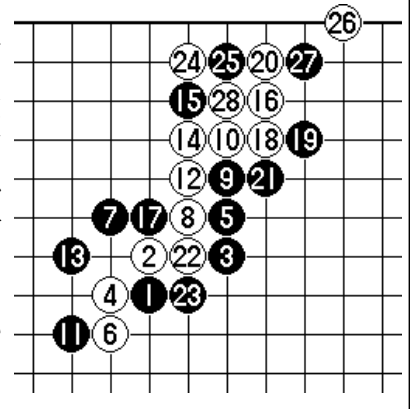


残月4題から黒13と意欲的な手を打ち、以下白の猛攻をかわして最後は禁手逃れを打って華麗に勝ったように見えた。しかしよく検討してみると、黒17が少々欲張りだった。次図のように白18から簡単に三々禁で勝っていた。実戦はこれに気づかず、白18から違う攻め方をしたので白勝ちにならなかった。岡部君も顔で勝つ域に達しているようである。

<卵坊黒:スシュコフ白>

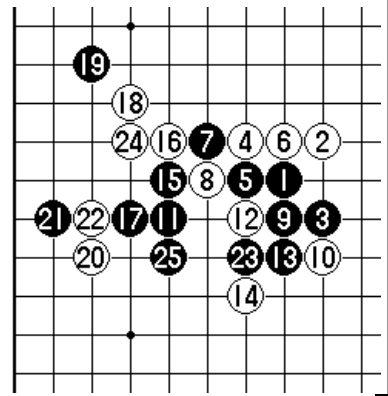


別に皮肉で言っている訳ではなく、こういう勝ちをしていかないと、長丁場の戦いを凌げない。次に、卵坊さんの一局を見てみよう。相手は強豪のスシュコフである。



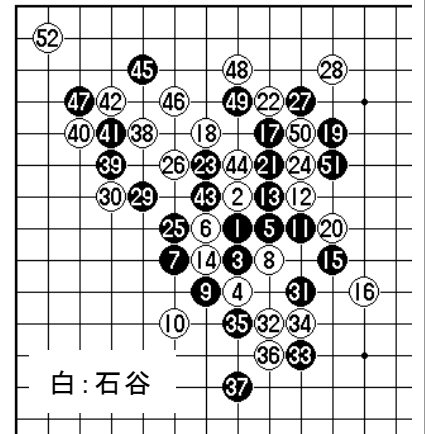
雲月から黒5と引く形は専門的には黒勝ちだろうが、実戦的には知識がないと打ちこなせない。黒7は反対から叩いた方が良く、黒9と打って簡単に勝てそうだが、白10で桂馬の網にかかってしまう。こうなってしまうのは、黒はもがけばもがくだけ苦しくなる。以下スシュコフの軍門に下ったのはやむを得ないだろう。次は久富七段。久富さんは策氏らしい作戦をかけていたが、なかなか決まらずに苦勞していた。その中で快勝の一局をご紹介しよう。白のサンドストロームは私もこの前ストックホルムで対戦した。秋から日本にやってくるという。浦月黒5に対し白6は趣向だが、白8は9に止める所だろう。黒9と引かれてしまつては浦月定石のようになつてしまった。黒15とミセ手から勝つのはおなじみの手筋である。

＜久富黒：サンドストローム白＞



以下黒25まで黒は流れるような手順で勝ちをものにしました。

石谷九段はQTが不調でまさかの勝ち星なしに終わったが、この鬱憤をBTで晴らした。原動力となったのが松月定石の作戦。これは私が連珠世界に連載したもののだが、書いた本人でも忘れてしまっていた。白18が作戦で、黒19では黒の嵌りである。ここは24と打つのが正解で（四ノビを打つても打たなくてもいい）、以下上辺に追い勝ちがある。白20の防ぎをうっかりしたのかもしれないが、



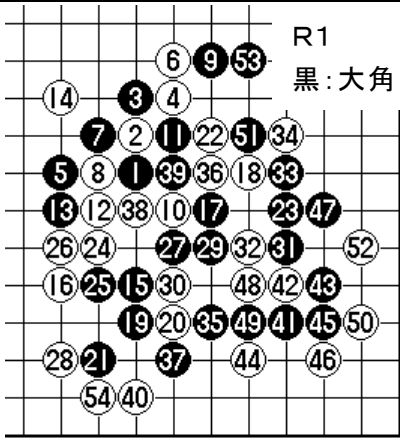
黒23で50と引くと左止めで四三が残る。だから黒23と防ぎに行つたのだが、白26とがっちり止めてもう負けはない。以下の確に攻めて強豪フェドロキンを破つて3位を確定させた。石谷さんは今回がラストの世界戦と仰っていたが、これで次回QTシード権を確保したので次回も行けますね！

さて、QTが終われば次はATだ。1日目の夜に速報を見て大角君が1勝1敗とあつた。まずまずと思つて見てみたら、1回戦の夕

イムラ戦があれ？という棋譜だつた。早速パソコンで調べてみると、やっぱり黒勝ちであつた。寒星から白6の作戦は強いとは思えないが相手の研究を避けたものだろう。黒7は11の方が普通だろうが、これも相手の研究を避けたためだろう。白14が少し甘着のよう

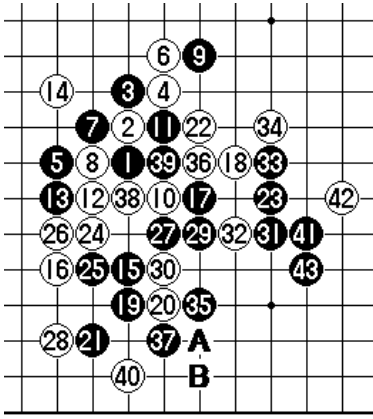
で、黒15からは名人位決定戦を彷彿とさせる攻めで、黒勝ち寸前まで行つた。

R1 黒：大角



勝つたと思つて打つた黒41、43が白44のノリ手を見落とした一手。ただ私も

見た時には白44のノリ手が見えておらず、これで楽勝じゃん！と思つたので、盲点になるノリ手ではある。しかし、ATでは言い訳は通用しない。もしこれを勝つていれば優勝だったが、これは結果論だろう。



なお、黒41ではこう打つのが必勝の一手で、AやBの四ノビはせずに含みで利かすのが連珠らしい打ち方だ。

今回は中国勢が振るわなかったが、次回は巻き返してくるだろう。日本も大角、岡部に続く若手が育つてくれるのを願っている。